「知らない食べ物」

ヨハネによる福音書 4 章 31～38 節

もし、イエス様がこの世にお出でになったら、この世の暗闇は終わる。
もし、私が一人の方のお役にでも立てたら、私の人生は空しくない。
もし、私が病める人とずっと一緒にいられたら、私の胸は満たされる。
もし、私が友なき者の友となれたら、私はこんなに幸せなことはない。
・・・「イエス様がこの世にお出でになったこと」を一人の友にでも伝えられたら、
私はこの世に生まれてきた甲斐がある。
もし、イエス様がこの世にお出でになったら、
私はイエス様をお与えくださった神様の愛を讃える。
・・・陰になって守り導いてくださった聖霊に感謝の祈りを捧げる。
もし、イエス様がこの世にお出でになったら、この世は光り輝く。
確かにイエス様がお出でになったのだから、
きっと、私たちの祈りは叶えられる。
確かに今日、イエスさまがお生まれになったのだから、
きっと、私たちも光を放ち、その光を分かち合うことができる。
ホサナ、そして、レット・イット・ビー。

長崎時代にお世話になった松本 寛とおっしゃる教会員が 2000 年のクリスマスに詠まれたものです。松本さんはこの詩を詠んだそのクリスマスの後、年が明けて数日後に静かに天に召されました。松本さんは長崎の活水女学院で長年 英文学を教えておられましたが、召されるまでの 25 年間、腎臓を患って、人工透析の日々が続いていました。そして、最後の数年間は、腎臓の機能が次第に悪化し、心臓の周りにも水が溜まるようになって、入退院の繰り返しだったと聞いています。しかし、そんな松本さんでしたが、十分でない体調を慎重に管理しながら、教会の執事として、その働きに献身的に尽くしてくださいました。松本さんの詩を御紹介したのは、そんな松本さんの信仰の思いが詩の随所に溢れているからです。とりわけ、「もし、私が一人の方のお役にでも立てたら、私の人生は空しくない」「『イエス様がこの世にお出でになったこと』を一人の友にでも伝えられたら、私はこの世に生まれてきた甲斐がある」と語られるその言葉の内には、松本さんの祈りが満ちているように感じられます。実際、それは、学生に対するその関わり方に具体的な形となって現われていました。活水女学院はプロテスタントのミッションスクールで、メソジストという教派に属しています。当時、プロテスタントに限って言えば、活水には 10 人ほど クリスチャンの

学生がいました。ところが、そのうちの 7、8 人はメソジストでない私たちバプテストの教会に来ていて、私たちのところでバプテスマを受けた学生も一人ならずいました。なんで皆(みな)んな バプテストの教会に行くのかね、と不思議がられてもいました。実のところ、その理由は、ほかならぬ松本さんの存在にありました。学生たちは言っていました。「松本先生の研究室に行くと、いつも温かいコーヒーで歓迎してくださって、心も体もあたたかくしてくださるんです。いつ行っても、『よく来てくれたねー』と、喜んで迎えてくれるんです」。その温かさの中に、学生たちはイエス・キリストの香りを感じ取った。そして、教会を訪れ、松本さんの中に生きておられた主イエスに触れたのでした。「お別れの会」には教え子たちが集まって、松本さんから受け継いだ信仰の証(あか)しを語り合ったと聞いています。

松本さんが願ったのは、イエス・キリストの御業(みわざ)に連なることでした。主イエスの御業に、自分も加えていただきたい。そして、主イエスがそうしてくださったように、大切なものを分かち合うことにおいて、自分もまた 一人の人のお役にでも立ちたい。そう祈り願って、体の不調を押しつつも、その人生を最後まで歩まれたのでした。けれども、それこそが松本さんの元気の源であり、松本さんに豊かないのちを与え続けたものだったのではないか、と 今改めてそう思わされています。松本さんは当初、働けるのは 5 年程度と医師から言われたといいます。しかし、その後 20 年以上にもわたって、学校で、そして教会で生き生きと働き続けられました。それはいったい、何故(なにゆえ)だったのか。そこにはなにがしか、かけがえのない真理が息づいていたように思われます。

今月の聖書の箇所は、前々回の部分、すなわち イエス・キリストの内に尋常の人間にはないものを感じ取ったサマリアの女性が町に行き、町の人々を連れて再び主イエスのもとに戻ってくる、その間(かん)の主イエスと弟子たちとのやり取りを記した箇所です。31 節の「その間(あいだ)に」とは、この間(かん)のことを指しています。ここで、弟子たちはイエス・キリストに、町で買ってきた食べ物を勧めます。「ラビ〔すなわち、先生〕、食事をどうぞ」(31)。ところが、主イエスの口からは、思いがけない言葉が返ってきます。32 節、「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」。皆、朝から歩きづめです。時間はすでに昼を過ぎて、誰もが腹ぺこです。弟子たちが 33 節で、「だれかが食べ物を持って来たのだろうか」と互いに言っても不思議はありません。しかし、イエス・キリストは「あなたがたの知らない食べ物が・・・」と言われる。それはいったい、何なのか。どんな食べ物なのか。弟子たちでなくとも、頭を捻(ひね)って当然かと思います。けれども、主イエスの言説は繰り返しそうであるように、ここでもまた、どこか戸惑いを憶(おぼ)えさせられる そうしたところにこそ、その語りかけの中心があるように思われます。

そもそも、聖書を読み進むと気づかされることがないでしょうか。ヨハネによる福音書の場合、とりわけ明確に描かれていることですが、往々にして 人々のピントがずれていることです。弟子たちも例外ではないようです。イエス・キリストの言葉を表面的な意味合いでしか聞いていません。言葉の上だけの即物的意味合いでしか聞けていない、と言ったらよいでしょうか。主イエスの言わんとさ

れている、もう一つ奥の真の意味合いが聴き取れない。理解できずにいます。そのようにして、今また、イエス・キリストの言われる食べ物がどんなものなのか、弟子たちには想いが及ばないようです。言葉の奥を聴き取る耳、出来事の奥を見抜く目。それらを改めて求められているように感じます。

イエス・キリストは言われます。34 節、「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心(みこころ)を行い、その業(わざ)を成し遂げることである」。主イエスは明らかに、弟子たちの手にある食べ物とは違う何かで満たされています。ならば、それはいったい、何なのでしょう？ それを考えるにあたってかぎとなるのは、ここでもまた、文脈の中で・文脈に添ってそれを読み解くことかと思われます。主イエスの食べ物と聞くと、信仰に慣れ親しんだ私たちは半ば反射的に、父なる神との交わりがそれであり、そのための静思の時・祈りの時がそれだろう、と即断しがちです。しかしながら、ここでは「わたしをお遣わしになった方の御心を行なうこと、その業を成し遂げること」と、主イエス自(みずか)らがその食べ物の説明をしておられます。どうやら、交わりや祈りといった、どこか一般的・抽象的なものとは少しく違うようです。なぜならば、ここではそうではなく、サマリアに入られて以降生じてきた、そして今もなお進行中の 目の前のその具体的な出来事を御覧になって、主イエスはそう言われているからです。つまり、サマリアの女性が「いのちの泉」に目を開かれ、「真(まこと)の礼拝」に心を開かれた。そして、御自身を通して「救い主」を知りつつある。それだけではない。そのことを町の人々にまで知らせ、彼らをもその同じところに連れてこようとしている。これらの様(さま)を御覧になって、神の御心がなされつつある、その業が成りつつある、と主イエスは心を躍らせられたのではないでしょうか。そのうれしさこそ、主イエスを満たした食べ物にほかならないように思います。

神の御心(みこころ)。それは、行(ゆ)き場(ば)のない者が安らぎの場を見つけることではないでしょうか。心の渇いた者がそれを潤す泉を見出(みいだ)すことではないでしょうか。だからこそ、サマリアの女性がそのようにして いのちの在(あ)り処(か)を知ったことを、主イエスは胸をいっぱいにして喜ばれたのだろうと思います。36 節で「永遠の命に至る実」と言っておられるのは、そのいのちが神の永遠へと結ばれていることを教えるものです。真(まこと)のいのちを共にすること。そこから来るうれしさこそ、主イエスの言われた「あなたがたの知らない食べ物」に違いないと思わされています。事は、単にパーティーやコンサートに行って楽しむのとは違います。誰にとっても、それはきっと 小さなことではないはずです。実際、人はいつの時代も、自分の人生はこれでいいのか、何か足りはしないか、と迷いながら、行(ゆ)く手(て)を探りながら生きてきたのではないでしょうか。この私たちも例外ではなく、形こそ違え、皆そのようにして、どこかでいのちの源を探し求め、手探りをして歩いているように思えてなりません。

イエス・キリストはそのことを御存じだった。それで、こう言われたのだと思います。35 節です。「目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている」。それはそもそもは、「刈り入れまで まだ四か月もある」(35) との言葉に対するものでした。これは、当時、格言として言われていた言葉です。パレスチナでは食用に小麦を植えますが、種を蒔(ま)き終えてから刈り入れを

始めるまで、約４カ月間 待たなければなりません。そこから生まれた格言です。曰く、「世の中には、急いてもどうにもならぬことがあるもんだ」と。サマリアに赴く前、弟子たちはおそらく、主イエスにこう意見していたのではないでしょうか。「サマリアはたしかに、福音を必要としてはいます。でも、その地に入るのはまだ早すぎるのではないでしょうか。まずは耕して、次に種を蒔いて、そしてしばらく 時を待たなければなりません。今はまだ、その時とは思えません」。「刈り入れまで まだ四か月も・・・」との先の一節は、これを受けた言葉と思われます。これに対し、しかし、主イエスは言われるのでした。「〔だが〕 わたしは言っておく。目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている」

目を上げると きっと、そこには、色づいた畑が広がっていたにちがいありません。一同のいたサマリアのシカルは、パレスチナ随一の穀倉地帯の中心に位置していました。しかも、聖書の記述からして、季節は刈り入れ時の 5、6 月ごろと考えられます。2 章のいわゆる宮清めの事件（2：13〜22）が過越祭の直前（同 13 参照)、すなわち 3 月下旬ごろのことであり、その後 幾つかの出来事を経て この時に至っているからです。季節は、麦の刈り入れ時。目の前には、色づいた畑が広がっています。これを指差して、イエス・キリストは言われるのです。「目を上げて 畑を見るがよい。色づいて・・・」と。人々は、内を潤すいのちの源を求めている。神の下さる良き音信を待っている。生きる指針とその力を探して、福音の言葉を待っている。それを後回しにすることはできない。サマリアの人たちにも今、それを届けなければならない。色づいた畑を指差しながら、主イエスはそう言われたのではないでしょうか。

しかも、想像力を豊かに膨らますと、ここからは、さらにも印象的な光景が浮かび上がってきます。それは、「畑が色づいている」という、その様子と関係しています。実は、「色づいて・・・」とある その「色づいて」という表現は私たち読み手の理解を勘案した翻訳で、元々のギリシア語では "λευκαί（<λευκή）" という語が用いられています。これは「白い」という意味の形容詞で、ここではそれが叙述的に「白くなって（いる)」というふうに使われています。ですが、麦畑が収穫の時を迎え、その実が穂にたわわに実っているのを見て、私たちは普通、何と言ってそれを描写するでしょうか。畑が白くなっている、とはまず言わないでしょう。これはどうやら日本語だけの問題ではなく、例えば英語圏でも同様のようです。それで、なんとか辻褄が通るようにと、それぞれに工夫をして訳出しています。邦訳の聖書では、口語訳も新共同訳同様、「色づいて」を採用。文語訳にいたっては、もっと直截に「黄みて」となっています。黄金色になって、ということです。英訳のそれも似ていて、「実などが熟した」という意味合いの "ripe" という訳語を当てている聖書が多く目につきます（NRSV、NIV、TEV 他)。ただし、そうしたなかでも、英訳聖書の場合、"white" すなわち「白くなって」と、原語のまま訳出しているものもあります（NKJV, JB 等)。ちなみに、いわゆる岩波訳では、ほぼ原語のとおりに「白っぽくなって」と表現しています。そもそも、元のギリシア語を見てみると、そこには「光り輝く」といった意味合いがあり、それが「衣服」の類いに多く適用され、「(光沢を帯びて）白い」といった表現として用いられていたことが分かります。と同時に、実際には色調にも幅があり、白から灰色までの色合いがそこに含まれていたことも見て取れます。こ

うしたあれこれを思い巡らすとき、そこからどんな情景が膨らんでくるでしょうか。そこにはたしかに、色づいた畑が広がっていたことでしょう。しかし、はたしてそれだけだったのでしょうか。実際、こんな一文があります。モートン（H. V. Morton）という イギリスの著名な旅行作家――パレスチナの紀行でも知られる――が現地での経験を記したものです。

私は丁度、ヤコブの井戸の傍らに腰を下ろしていました。すると そこに、イエスが御覧になっていた方角から、アラブ人の一団がやってきたのです。そのとき、私の目に入ったのは何だったでしょうか。陽の光に照らされて輝く、彼らの白い衣服でした。イエスはおそらく、同じ方向を指して言われたのではないでしょうか。白い衣服に身を包み、イエスの言葉を聴こうと〔麦畑の向こうから〕やってくるサマリアの人たちの方を指差しながら。

ヨハネに記された場面がもし これと重なるものだとしたら、なんと美しく印象的な光景なのでしょうか。想い描く者の目を視覚的・映像的に惹き付けるだけでなく、その心をも深く感動的に捉えます。黄金色に色づいた麦畑が広がります。その畑に目をやりながら、主イエスはそのさらに向こうを指差されます。白い衣に身を包んだサマリアの人々。その彼らが陽光に照らされながらやってくる姿です。そして、言われるのでした。「サマリアでもこんなに色づいて、刈り入れを待っている。彼らの思い・願いが見えないか。その熱心が見て取れないか。時は今なのだ」

こうして、イエス・キリストが続けて言われた言葉。それが 36 節、37 節の言葉でした。「こうして、種を蒔く人も刈る人も、共に喜ぶのである。そこで、『一人が種を蒔き、別の人が刈り入れる』ということわざのとおりになる」。それは、弟子たちが身をもって教えられたことでした。主イエスがサマリアの女性に、いのちの泉の在り処を教えられました。うれしさに心躍らせたそのサマリアの女性が町に行き、人々を連れてきました。そして今、ふたりが蒔いた種の実りを刈り入れるその場に、弟子たちが立ち会っています。一人が種を蒔き、別の人が刈り入れようとしています。

事は現在も変わらないのではないでしょうか。私たちもまた 例外なく、多くの祈りと種蒔きの業によって導かれ、ここにいるように思います。こうしたことと関連し、信仰に生きられた一人の御婦人の姿を知らされ、多くを教えられたことを想い起こします。その御婦人 A さんはすでに天に召されましたが、長年 糖尿を患い、身体的な苦労を負いつつも、しかし 教会学校の教師として最後まで献身的に奉仕を続けられたといいます。この A さんの生前の逸話として耳にし、記憶に印象的に残ったのが、ほかならぬ種蒔きの働きでした。A さんはお花の先生もされていて、そうしたなか、お弟子さんたちとの出会いを大切にされ、折に触れては 御自身の信仰の証しをしておられました。その後、糖尿に加え 癌も患って入院をされるのですが、その語らいは病院のベッドの上でも続けられました。病院に行くといつも、ベッドの周りにはお弟子さんたちがいて、弾んだ声が聞こえてい

たといいます。A さんは数年後、癌で召されました。けれども、こうしたお弟子さんたちの中から、イエス・キリストへの信仰を告白する人たちが一人ならず出ました。A さんが召された後(のち)に教会員になられた方もおられました。その姿を、御本人は見ることができなかった。しかし、A さんの蒔かれたその種は多くの実を付け、刈り入れに至ったのでした。お弟子さんたちも A さんに倣って、その後、教会学校の教師として奉仕をされたと聞いています。

さらに、この A さんについてはこれだけでなく、もう一つ、心に残る想い出をお聞きしました。今月の主イエスの言葉にとりわけ通じるものがあると思われますので、加えて御紹介したいと思います。それは、A さんが担当されていた教会学校のクラスから、バプテスマの希望者が出たときのことです。担当は、小学科の中学年クラス。そのクラスで、あるとき、生徒からバプテスマの申し出があったといいます。親御さんはお二人共 クリスチャンだったそうですが、しかし、自分たちのほうからはバプテスマを促すようなことは何も言っていなかったとのこと。本人が自分で決心して申し出たようで、ちょっと驚かされた、と言っておられたとか。こうしてバプテスマの時を迎えるのですが、それに先立つ信仰告白は次のようなものでした。

わたしは、バプテスマを受けたいと思います。なぜかというと、神さまのことをいっぱい信じたということをみんなに分かってもらいたいからです。そして、もっとお勉強をして、神さまのことを知りたいと思います。

わたしは、バプテスマのお勉強をしていた時、神さまってすごいなあと思ったことがあります。今まで勉強したことで、一番すごかったことは、神さまが世界をお創りになったことです。わたしはすごいなあと思いました。

それに、神さまってやさしいなあと思いました。それは、わたしたちの悪い心をゆるすためにイエスさまが十字架の上で死んでくださったからです。だから、神さまはちょっとかわいそうだなあと思いました。みんな、悪い心といい心があります。わたしもです。一番悪いことは、イエスさまのことを信じないことです。だから、イエスさまにごめんなさいを言いたいです。それは、小さいとき、あんまりイエスさまのことを知らなかったからです。それと、ありがとうを言いたいです。いつも守ってくださるからです。イエスさまは、わたしのことも好きだからです。神さまって、本当にやさしい方なんだなあという気持ちがしました。

バプテスマを受けた後(あと)、わたしのしたいことは、毎日聖書を読むことです。そして、バプテスマを受けたら、神さまのお勉強を今までの倍ぐらいすることです。それに、お祈りをしたくない時もすることと、自分のことだけをお祈りしないで、お友だちのこともお祈りすることです。イエスさまのことをお友だちに話して、教会にも誘いたいと思います。毎週休まずに教会学校に行って、ちゃんと礼拝にも出ることです。それから、いじ悪をしないで、良い事をすることです。まだまだ、いっぱいあります。わたしは、イエスさまのことを忘れないで、いつまでも信じていきたいと思います。だから、バプ

テスマを受けたいです。・・・

最後に、教会の先生たち、神さまのことをたくさん教えてくださってありがとうございます。

信仰告白を読ませていただいて、私がまずうれしく感じたのは、小学生らしい素直な告白だということです。そして次に、A さんをはじめとする教会学校の先生方が信仰の種を蒔(ま)き、水を注ぎ続けられたということ。そのことが実によく見て取れたことでした。そのようにして、牧師以下 教会の人々に、そして誰にも増して 親御さんおふたりに、刈り入れの喜びをもたらしてくれた。そう感じさせられました。「教会の先生たち、神さまのことをたくさん教えてくださってありがとうございます」との一節を目にしたとき、私はそうした思いで心を熱くさせられました。

一人が種を蒔(ま)き、一人がその実を刈り取りながら、時を重ねる。それは教派のこととしても同様で、例えば日本のバプテストも 一つの言い方として、アメリカの宣教師たちが祈りと汗を注いで蒔き続けてくれた種を日本のクリスチャンが刈り入れた歴史であると言えはしないでしょうか。時を経、その宣教の在り方や性格をめぐって 評価が様々になされるのは当然のことながら、その事実は決して小さく軽いものではないように思われます。

それはまた 言い方を換えれば、後(あと)の者が先の者の働きに入れられる、同労の友の働きに加えられるということではないでしょうか。イエス・キリストは 38 節で「他の人々が労苦し、あなたがたはその労苦の実りにあずかっている」と言われますが、その「あずかっている」も実際、原語（εἰσελήλυθατε<εἰσέρχομαι）に忠実に訳すなら「入っている」というふうになります。英訳聖書の NRSV 等もそのようにして、ここを "… have entered into …" と訳出しています。弟子たちは、他の人々の労苦の実りの中に入っている、入れられている。私たちもまた、主イエスと生きる多くの人たちの労苦の実りの中に入れられ、そのようにして そこに入っているのではないでしょうか。それは何よりもまず、イエス・キリストの労苦から始まったもので、その御業(みわざ)があってのものです。主イエスがいのちの種を蒔(ま)いてくださった。私たちはその畑で実り、また その畑で刈り入れています。38 節で、弟子たちに向かって「あなたがたが自分では労苦しなかったものを刈り入れるために、わたしはあなたがたを遣わした」と主イエスが言われているのも、本質的にはこうした意味だろうと思います。さらにも付け加えるなら、38 節の最後の一節には、原文では実は、「実り」という言葉は記されていません。"ὑμεῖς εἰς τὸν κόπον αὐτῶν εἰσελήλυθατε" というのが、38 節を締(し)め括(くく)る最後の言葉の全体です。先ほどの NRSV に従えば、"you have entered into their labor" とだけになります。あなた方は彼らの労苦の中へとすでに入っている、ということです。とすれば、読みようによっては、こんなふうに理解できなくもないのではないか。すなわち、主イエスと共に、その働きの一端に触れる。そこで、知らなかった食べ物を食し、うれしくされて、主の御業にすでに入っている自分を、そこにすでに加えられている自分を知らされる。そのようにして、主の働きを継承していく者とされる。これがもし可能な読み方だとした

ら、実りにあずかるといった どこか受け身なニュアンスを超えて、より積極的な呼びかけがここにはある、より動的な招きがここにはあると思われるのですが、皆さんははたして、ここから何をどのように聴き取られるでしょうか。

種を蒔(ま)き、実りを待ち望んで、その実を刈り取る。そして、蒔く者も刈り入れる者も共に喜び、そのうれしさに満たされる。主イエスが言われた「（あなたがたの）知らない食べ物」とは、そのようにして心を熱くさせ、内を豊かに満たす、そうした働きなのではないでしょうか。真(まこと)のいのちを分かち合うことです。なぜならば、それは間違いなく、「お遣わしになった方の御心(みこころ)を行い、その業(わざ)を成し遂げること」だろうからです。事実、サマリアの女性もそのようにして、この食べ物を食しました。35～36 節で「既に、刈り入れる人は報酬を受け、永遠の命に至る実を集めている」と言われていますが、それはもしかすると、町の人々を連れて主イエスのもとに向かってくる その彼女を指してのことかもしれません。「見るがよい。彼女はすでに 町の人々を私のもとに招いて、その喜びを味わっている」と。松本さんもそうでした。A さんもそうでした。そしてまた、かの宣教師たちもきっと、そうだったのではないでしょうか。皆それぞれに主イエスの働きに加えられ、種蒔きと刈り入れの喜びに入れられたのだろうと思います。

主イエスはこの食べ物を食された。そして、その同じ食べ物を食するようにと、弟子たちを招かれ、また私たちを招かれているように感じます。

今月はここまでで、サマリアの女性をめぐる出来事も次回でいよいよ最終回になりますが、しかしここに至って、どこからともなく こんな声が聞こえてくるようにも思われます。曰(いわ)く、「それはそうだけど、でも、現在の日本は当時のパレスチナとは状況が違うんじゃないかな？だって、今の日本はそもそも、畑が色づいて刈り入れを待ってるなんてようには思えないし。教会に来る人は減って、増えないしね」。近年たしかに、教会を訪れる人足(ひとあし)は多くなく、時代の高齢化も相まって、そこに集う人々の減少傾向が続いています。しかしながら、こうした一方で同時に、各方面ですでに広く指摘されている事実もあります。それは、IT や SNS といった革命的な技術が開発され、飛躍的な進歩を遂げ続けている。そして、それらの恩恵のもと、人々は歴史上かつてない規模の結びつきを手にした。なのに、その人々がこれまた、歴史上かつてない広がりで孤独を感じている。技術の進歩とは裏腹に、このような現実が広範に顕在化しているというのです。今や、事あるごとに「絆(きずな)」の重要性が強調され、口を開けば「寄り添う」という言葉が飛び交っています。それらを今ほど耳にする時代もおそらくは、これまでになかったのではないでしょうか。にもかかわらず、かつてない広さと深さで、人々の内と間に孤独な思いが染みわたっています。言い様(い ょう)のない不安が漂い、死にたくなる、と言います。何かが生きづらい、と言う。孤独死が目につくようになり、最近では、夫婦だけの二人孤独死といった言葉まで聞かれるようになりました。果ては、SNS で相手を探し合い、お互いを道連れにして、一緒に自殺する。絆を探し、寄り添い合う相手を見つける手段の SNS が皮肉にも、互いの命を絶つためのツールにもなっているとは・・・。そもそも、絆とか

寄り添うとかいうことが繰り返し頻繁に語られるということ、そのこと自体がそれらの欠乏とそれらへの渇望を物語っているのかもしれません。だとしたら、今・この時の・この国もまた、本質的にはかの時代のパレスチナと大きく変わらないように思われるのですが、いかがでしょうか。私たちの前の畑はたしかに、「（すでに）色づいて刈り入れを待っている」とは言えないかもしれません。しかし、内を潤すいのちの水を渇望し、その水の湧き出る泉を探し求めている人たちがいるということ。しかも、決して少なくなくいるということ。そのことだけは疑いないように思われます。問われているのは、そのところに向かう私たちの本気度なのではないか。SNS 等も含め、様々な手段を尽くしてそうした渇望に気づく感性を持つこと。しかも、SNS 等のそれを超える深さと真実さとをもって、そこに立つということ。そのことが私たちに求められているように思われてなりません。

そのためにも、まずもって自分自身が泉の水を味わい、主イエスの下さるいのちにあずからねば、と思わされています。それがなければ、種を蒔(ま)くこともその実を刈ることも始まらないからです。聖書を通して、そのことを得させていただきたい。そのようにして、いのちの糧を 皆で共に求め、探し、そして味わって分かち合いたいと願っています。

〔祈り〕

愛する神様。

諸教会の歴史の背後に、また個々人の歴史の背後に多くの人たちの信仰の生涯があったことを憶(おぼ)えます。目立つことなく、しかし黙々とそれぞれの業(わざ)に勤(いそ)しみ、そして人知れず あなたの御許(みもと)に召された方たちもおられたことでしょう。それらがあってこそ、私たちの今があることを憶え、感謝いたします。

そうした方々の内にあなたが御自身のいのちを注がれ、うれしい食べ物を味わわせてくださったことを感謝いたします。願わくは、御子(みこ)イエス・キリストが食され、歴史の信仰者たちが食したその食べ物を、私たちにもまた味わわせてください。いかなる場に身を置こうとも、共々一緒にその食卓に着くことができますように。

私たちの一人ひとりを、恵みの御業(みわざ)を始めてくださったあなた御自身がその恵みの内に置いてくださいますように。そして、その歩みを教え導き、確かなものとしてください。日々、あなたを近く親しく知ることができますように。

主の御名(みな)によって願い、お祈りいたします。

アーメン